

マーケット概況（2020年10月）

10月の債券相場は、国内の材料に乏しい中、前月に続き狭いレンジで推移する展開となった。月初には、米国トランプ大統領の新型コロナウイルス感染が伝わると日米ともに株安債券高となり、10年360回債の利回りは月の高値となる0.015%まで低下した。その後は、6日に実施された30年債入札や13日の流動性供給入札が事前予想を下回る結果となったことから超長期ゾーン中心に軟調地合いとなり、30年債は0.645%、40年債は0.675%と、2020年7月2日以来の水準まで上昇した。月末にかけては、欧州各国で新型コロナウイルス感染症が急拡大したことや20年債入札を順調に通過したことで一時的に買い戻される場面も見られたが、米国大統領選後の財政拡張期待や国債増発懸念から米債安となった流れを受けて再びスティーピング基調に転じ、10年360回債は0.040%で取引を終えた。

<短国市場>

3M金利は投資家需要が乏しく月末にかけて概ね上昇した。2日の3M941回債入札は最高落札利回りが-0.14%台と、前回債の-0.16%台から上昇した。その後は需給環境が悪化したことから、9日の3M943回債入札では-0.08%台に、16日・23日の3M入札では-0.07%台に上昇した。月末にかけては投資家需要が戻り、30日の3M948回債入札では-0.08%台に小幅低下し、セカンダリー市場では最終的に-0.090%で月内の取引を終えた。6M金利は3M金利の上昇につられて、22日の6M946回債入札では最高落札利回りは-0.09%台と2017年6月以来の高水準となり、その後のセカンダリー市場では-0.10%台で推移した。一方、1Y金利は月を通して-0.1%前半で堅調に推移し-0.138%で月内の取引を終えた。

<一般債市場>

10年政保債の起債は無く、ベンチマークとなる10年地方債のスプレッドは前月比同水準の国債カーブ+10.0bpとなり、3ヵ月連続してタイト化していた流れが止まった。5年地方債は6ヵ月連続で0.02%クーポンを維持したことやスプレッドが前月から1.5bp程度上乗せされたことを受け、地方債はいずれも順調な販売状況だった。セカンダリー市場もスプレッドがワイドニングする傾向は無く、需給は安定していた。社債では1兆6,755億円(東京大学債、劣後ローン債、個人向け債含む)が発行された。アサヒグループホールディングスが劣後債を含み計4,100億円を起債し、1社で業種別の発行シェアトップを占めた。また、九州電力が電力会社としては初めて公募ハイブリッド債計2,000億円を起債したことも発行額の積み上げに繋がった。

◎ 主要債券月間四本値 ◎

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#360	0.020(1日)	0.015(2日)	0.040(30日)	0.040(30日)
#359	0.010(1日)	0.005(2日)	0.025(8日)	0.025(30日)
#349	-0.100(5日)	-0.100(5日)	-0.075(23日)	-0.100(29日)
#145(5Y)	-0.085(8日)	-0.120(16日)	-0.085(8日)	-0.095(30日)
#174(20Y)	0.395(20日)	0.395(20日)	0.415(30日)	0.410(30日)
#939-#946TDB(6M)	-0.149(2日)	-0.153(2日)	-0.100(22日)	-0.103(30日)
#940-#948TDB(3M)	-0.155(2日)	-0.160(2日)	-0.080(23日)	-0.090(30日)